三愛会会誌

1989 No.99

リコー三愛グループ

リコー
三愛
三愛石油
リコーエレメックス
日本リース
北九州コカ・コーラボトリング
三愛不動産

特集 旅のこころ

対　談

見て触れて手作りの旅

ゲスト

加藤　幸子 ═══ 三善　信一

作　家　　三愛会会長

旅の楽しさは下調べから

三善　このあいだ野鳥で楽しい経験をしました。

郷里の熊本から鹿児島まで行く途中、列車がツルの飛来地で有名な出水平野を通ったんです。

車掌さんに聞いたら、ツルの飛来地は出水の駅から車で二十分くらいだが、ときどき線路脇の田んぼにも飛んで来るというのです。いたら教えてくださいと頼んで、こちらも連れの者に「君は列車の右側、私は左側」と分担して見張ったんです。

ちょうど三羽見つけたら、車掌さんが息を切らして走ってきて「お客さん、いました、いました、あそこにいました。早く見てください」。

グリーン車は私たち二人だけで、お花見列車ならぬ「鶴見列車」でした。

加藤　ご郷里の熊本には、私も思い出があります。三十年も前ですが、北大を卒業する時の記念旅行に、九州を一周したんです。農学部の学生でしたので、各大学の寮とか農事試験場を泊まり歩きました。女子学生は私一人。熊本でやっと寮についたら、「女はダメだ」と、私だけ追い出されてしまったんです。仕方がないので、また町に戻って旅館に泊まりましたが、そんな目に遭ったのは熊本だけだったんです。それで熊本というのは、なんてひどい所だと、その当時は驚きました。今でもよく覚えているんです。(笑い)

三善　熊本より鹿児島の方が、もっと男尊女卑はひどいといわれていましたよ。もっとも今はそんなことはありませんがね。女性が強くなりましたから。

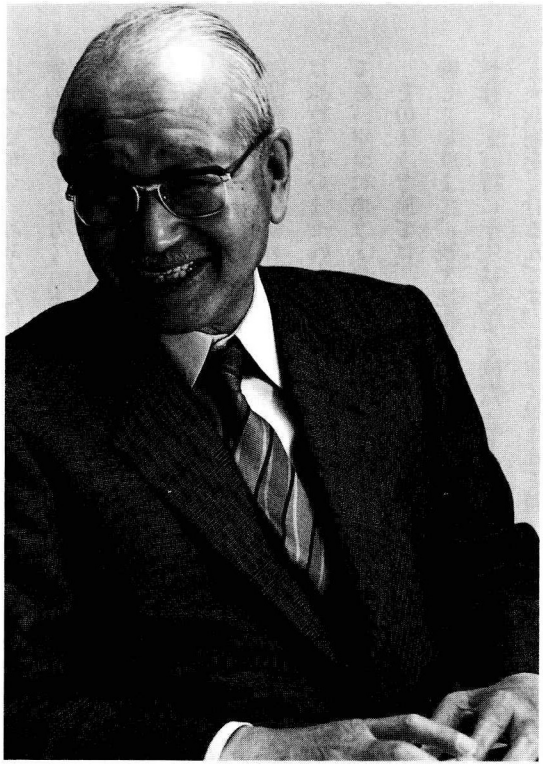
私は、旧制の高等学校まで熊本で、その後、ずっと東京なんです。学生時代は北海道まで、勤めてからは仕事の関係で、北は樺太、南は台湾まで行きました。

旅というのは、それだけで楽しいものですが、行く前に目的地の地形とか歴史を調べると、もっと面白いし、違った見方ができるもんです。

加藤　最近は旅行ブームで、連休の時なんか混んで大変ですが、実際は、行ったということだけで満足している人が多いようです。そうすると、本当に旅が好きな人が増えたためにブームが起きたのか疑問ですね。

事前に調べて行くというのは、旅を楽しくする良い方法だと思います。ほかに私は、双眼鏡をいつも持っていきます。なんでもない駅に降りた時でも、双眼鏡で周りを見ます。バードウォッチングが好きなので、対象はたいてい鳥ですが。

旅のこころ



三善：感受性豊かな若いうちに旅をするのは大切です。

加藤：双眼鏡、メモ帳……旅日記を書いています。

私には未知の場所に行く、あるいは知っている場所に行くとしても、それは何かをさがしに行くことなのです。そこで何かを発見する、とても楽しく感じるんです。

双眼鏡のほかに、どこにどういう鳥がいたか、どんな花が咲いていたかなどをメモする手帳も一緒に持っていきます。後になって見ますと、さまざまなことが思い出されます。旅日記の代りです。今の私の旅は、動植物をさがしながら行くという旅になっていますね。

三善　私の若い時分には、旅が好きだというより、あそこに行くとあれがうまいとか、あれが食べられるからという食い気の方が強かったですね。

昭和四年に高等学校に入りまして、全国の寮歌集で、よく「北辰斜め」から北大寮歌の「都ぞ弥生」まで歌いました。その歌詞の中に、〝豊かに稔れる　石狩の野に　雁(かりがね)はるばる沈みてゆけば　羊群声なく　牧舎に帰り〟というのがあり、それに惹かれて北海道に旅をしましてね。本当に羊がいるのだろうか、とか、石狩の野とはどんなところだろうかというわけです。

今は確かに、あそこに行っておかないと話題に遅れるから、といって出かける人も多いかも知れませんが、旅をする人が多くなったことは良いことだと思います。

次の段階で、どうせ行くなら、それにもう一つ意義、ポイントを付け加えることができれば、もっと旅が面白くなるのではないでしょうか。レジャーで行くのに、いちいち意義を見つける必要があるかと言われればその通りなんですが、教養として身に付き、後で反芻して味わうことができるのも、旅の楽しみの一つです。

若者の旅　ふれあいの旅

加藤　今は、まわりにつられて行くことが多いのではないでしょうか。連休のことを考えても、車で渋滞の中を往復して、運転する人は帰ってから、ああくたびれた、だけです。旅の楽しみではなく、ドライブの楽しみになっていますね。旅の楽しみのあり方が違ってきてしまっています。

私は学生のときに、大きなリュックを背負って北海道を旅しました。

昭和三十年の初めごろは、有名観光地以外は旅行者はいませんし、ちょっと山の中に入ると、クマにあうというような旅でした。

そのような旅では、人と会うのが、とても楽しくなります。観光地化されていない土地へ行くと、特に学生は「よく来た、よく来た」と大歓迎を受けるんです。お金をほとんど持っていないので、泊まるのは一般の農家、漁師の家、学校の先生の家とか学校です。知らない土地で、初対面の人に親切にされ、宿を借り食事も出していただくと、いつまでも忘れられない懐かしい思い出になります。

しかし、その土地に住む人にふれあえるような旅の仕方は、もはや過去のものになってしまったのでしょうか。寂しい気がします。

三善　若い時ほど、物事を新鮮に感じることができますから、思い出深い旅になりますね。

私も、小さい時の修学旅行がとても印象的です。熊本から長崎・佐世保旅行というのがありました。帰ってくると、学校で印象記を書かせます。何時何分にどこへ行ったという日誌的なものより、どこがいちばん印象的だったかを書くんです。長崎の造船所では、船の大きさに驚いたとか、佐世保では、当時珍しかった飛行機が飛んでいたなど。

年配になって、レジャーとして旅をするのも結構ですが、なるべく感受性の豊かな若いうちに旅をするのは大切でしょうね。

「かわいい子には旅をさせろ」という言葉がありますが、あれは、多少苦労してみなさいという意味と、いろいろな事物を見たり、聞いたりして教養を高めなさいという意味があると思うんです。

世の中には、こんなに貧乏な人がいる、それに比べて私は恵まれているとか、こんな金持ちもいる、自分も努力しようとか。そういうものは、自分の目で確かめた方が印象深い。自分の環境と違うものを求める旅が、若い時には必要ではないでしょうか。

旅番組と本当の旅の違い

三善　テレビの発達には素晴らしいものがあります。お相撲も、部分的にはテレビで見た方がハッキリ分かる。ところが、国技館に行くと、あの雰囲気は違います。テレビでは絶対味わえない。私はラグビーも好きですが、テレビの画面では、球さばきはきれいに映っているんですが、全体のことは分かりませんね。

また外国の街の風景にしても、ロンドンとかパリをあんまり取り上げるので、行きもしないのに行った気になってしまう。実際に行ってみるとテレビとは大違いで、実物を見ないと本当のところは分からない。ですから、テレビとか映画とかを見ていることが、かえって旅にいくことを阻害しているのではないかと、疑問に思うこともあります。

加藤　同じことが自然とのふれあいでもいえます。

自然番組が大はやりで、野鳥とか美しい花

とか、珍しい昆虫とかこと細かに紹介しています。しかし、それは実際に自然の中に出て行って体験したものではありません。映像としての美しさであり、自然とはまったく違う、一種の擬似体験にしか過ぎないのです。

私は、子供たちの小さかったころから自然観察のグループを作って十七年になります。ところが、テレビが普及してくると、テレビで見た方が面白いという子供が出てくるのですね。

どうしてかというと、野外に出ると、つらいことがある。歩かなくてはならないからくたびれる。今の子供たちは歩き方がヘタですから。また、雨が降ったり、風が吹いたりもします。テレビに出てくるような美しい花も自分で探さなくてはなりません。そうすると、こたつに入ってテレビで見ていた方が、自然について詳しくなって、楽だということになってしまいます。

私は、広々とした自然にあこがれて、北大に入りました。その時はテレビもありませんし、北海道についての情報も少なかったですから、自分で行ってみることに意義がありました。

ところが、今の子供たちは、いろいろな情報によって、北海道のイメージを持っています。ですから、初めて行っても、感激しないわけではありませんが、私たちがかつて感じたほどの新鮮なショックはないらしいんです。また北海道の方も東京志向が強く、どこへ行っても都会風になってきたということもあります。

三善　文明の利器というのは、非常にいい面と悪い面がありますね。テレビで紹介された風景がまだあそこには残っているから行ってみたいと、意欲をわかせる半面、そんな所へ苦労して行くのなら、再放送の時また見ようとか、ビデオにとっておこうという人も出てくるのも事実です。

電卓やコンピューターが発達した現在、ソロバンなんかいらない、どうせ結果は同じだ、という考えがあります。けれども、私は計算なり、字を書くことは、その結果だけでなく、そのプロセスが大切で、頭の訓練になっているし、手先の器用さも養成していると考えています。結果だけでなく、そのプロセスも必要だということが、今は忘れられているようです。

加藤　上手に情報を利用して実体験をし、与えられた情報以上のプラスアルファーを得なければつまりませんね。

たとえば、テレビで「いい場所」とか「いい旅」といった番組を毎日のように流していますが、放送があった時だけ、ワッと人が集まるそうです。しかし、出かけて行った人がテレビの与えてくれたもの以上のものを味わったかどうかは疑問です。

本当に旅を楽しむなら、テレビの番組を上手に利用して、自分の旅、自分自身が作り出す旅にしなければなりません。行く所は同じでもいいのです。同じ花を見て、ある人は色に感動し、ある人は形に、あるいは香りに感動するように、自分の感じ方が必ずあるはずです。テレビの旅は、自分の旅を創造するプロセスに欠けているために、せっかく時間と

三善信一（みよし・しんいち）＝明治45年熊本県生まれ。昭和12年、東京帝国大学法律学科を卒業し、同年、日本曹達株式会社に入社。昭和38年、株式会社リコーに入社。常務、専務、会長を経て、現在、同社取締役相談役。三愛会会長等、関連会社役員を兼務。昭和48年藍綬褒章、同57年勲三等瑞宝章を受章。
著書に『組織づくりの心に火を燃やせ』（日本経営出版会）ほか。

お金をかけていっても、疲労感と、そこへ行ったという事実についての満足しか残りません。

三善　私たちの若いころとは違って、いまでは、旅の本も旅行雑誌もありますし、テレビもビデオもあります。質の高い情報も簡単に手に入れられます。それでも、なおかつ旅行したいというのですから、そこで何かをつかんでこなくては、もったいないですね。

加藤　最近、旅行をする人が増えたのはそれがあると思います。ナマのものを見たいという要求が。そのためには工夫をする必要があります。セットされたものに乗ってスーッと行って、スーッと帰ってくるだけでなく、それにプラスアルファーするものを自分で作っていかなくてはなりません。

私は、必ず双眼鏡のほかに小さな動植物図鑑を持っていきます。旅先で、休憩のために草の上に腰を下ろした時に、小さな花が咲いていることがあります。ゆきずりの旅ですけれど、草花に「コンニチハ」とあいさつするかわりに、図鑑でその名前を調べるんです。

三善　亡くなった天皇陛下がそうだったそうですね。那須の御用邸においでになって、散策をなさる時も、去年来た時はこうだったのに、今年は雨が少なかったから、大変だったろうね、というふうにおっしゃりながら、観察されたそうです。

加藤　天皇陛下という制約がなかったら、あちこち旅をされた方ではないでしょうか。

熊本市の水前寺公園にササゴイというサギの仲間が住んでいますね。ご存じでしょうか。そのササゴイが釣りを始めたのです。少し前になりますが、水前寺公園を散歩する機会がありました。池の周りに人がたくさんいて、パンくずかなにかを魚にやっているのです。

三善　そうですね、五十円か百円で魚の餌を売っていますね。

加藤　餌をやる人の所から少し離れたところで、ササゴイが自分の足もとに枯れ草みたいなものを、くちばしで拾い、水面にほうるんです。それを餌と間違えて魚が寄ってくる。それをパクッと食べてしまう。そんな光景を面白くて三十分くらい見ていましたが、飛んできたハエもパッと捕まえてほうる。また魚が寄ってくるというわけです。水前寺公園のササゴイの釣りの成功率はかなり高いそうです。どうして釣りを覚えたか?、池の魚に人間が餌をやるのを見て始めたのではないかといわれています。

三善　子供のころは水前寺公園のすぐそばに住んでいたことがありましたが、まったく知りませんでした。

加藤　昔住んでいた所で、鳥が珍しいことを始めたとか、そういう新発見も旅の面白さではないかと思うのです。

女性と旅

三善　今年のゴールデンウィークの状況を見ても海外旅行が盛んですが、七、八割は女の子ではないでしょうか。女性のレジャーとしての旅が大変多くなってきました。ある意味で、女性の方が旅についてたくさんの知識を持っているのかも知れません。これは、次代を担う子供のことを考えると、大変結構なことです。

しつけをしたり、教育をしたりするのは母親ですし、お母さんの教育が子供に与える影響というのは実に大きいです。ですから、女性がいろいろな風物に接して知識が豊富になることは、本当に大切なことです。

父親が、会社の出張ついでにどこかに行って来たといっても、その話を子供にはあまり話しません。お母さんでしたら違います。自分がOLをしていた時のことを思いだして、子供と遊びながら、国内はもちろん、ハワイに行った時はこうだったとか、フィリピンではこんな貧しい生活をしていて、裸足よ、などという話をすれば、自然と国際教育にも結びつきます。

加藤　本当に母親の影響は大きいですね。たとえ共働きでも、父親より影響力があります。私は旅を強制したわけでもないのに、うちの娘たちも、どこかに行くことがとても好きです。

私は、自分が旅に出たいものですから、子供が歩けるようになると、手を引いてあちこち一緒に歩きました。幼稚園ぐらいの時から、山を歩かせましたし、海にも行きました。

三善　日本人は国際化しなければならないとか、日本自体がもっと国際社会の一員として責任を果たさなくてはならない、といわれます。そのためには、外国への旅行は大変よいことです。情報化時代ですし、交通手段も発達しました。

しかし、せっかく行くのですから、何か目的意識を持っていくべきではないか、予備知識を持っていった方がいいのではないかと思います。

加藤　楽しみを増すために、私はずいぶん調べてから出かけます。

東アジアの野鳥の会議で、四月に初めてタイに行きました。今まで関心がなかったのですが、これを機会に、タイの作家の本を二冊ばかり読みました。とてもすぐれた作品で、今まで考えていたものとはまったく違うのです。たった四日間の旅でしたが、そういうことを調べていかないよりも、何倍もタイを知り、理解し、楽しむことができたと思っています。

また旅には、そのような知的な楽しみもある一方、もう一つ偶然性の楽しみというものもあります。思いがけず、いろいろなものに出合ったり、鳥が飛んできたり、池のほとりに鹿がヒョイと出てきたり、隣の席に座ったタイの人と友達になったり、そういう偶然性の楽しみがあります。

三善　数年前ヨーロッパに行きました。スペイン、ポルトガルは、昔から日本と関係が深い国ですが、今は大国とはいわれません。しかし、数字には表われない高い文化を持っています。

日本人は、一般にGNPなどで国の序列を作って、それがその国の良し悪しになっているような気風が多いようです。どこかの町へ行くと、すぐ人口は何人ですかと聞いて、その数によってその都会を推し測ってしまう悪い癖があります。人口とかGNPとかの数字に表われない歴史的背景を持った都会もあれば、今でこそ人口が増え生産も上がっているけれど、中身は何も整備していない都会もあります。コンピューターからは引き出せない要素を、自然の事物は秘めていることを知る必要があります。そのためには、やはり行ってみる以外にないのではないでしょうか。

加藤さんは作家ですから、旅も仕事になってしまうということはないのですか。

加藤　リフレッシュのための旅もします。昨年は屋久島に行きました。あまり仕事が詰まっていてくたびれ果てたため、どこか電話のかかってこないところへ行こうと思いまして。

屋久島は八月がシーズンですが、一番シーズンオフの十二月に行ったんです。

普通は飛行機で渡るのですが、のんびりしようと、鹿児島から船にしました。四時間か

加藤幸子（かとう・ゆきこ）＝1936年北海道生まれ。本名、白木幸子。北大農業学部卒後、農業技術研究所、日本自然保護協会などの勤務を経て作家活動に入る。1983年、子供の頃の中国体験をもとにした『夢の壁』で第88回芥川賞を受けて作家としての地位を固め、この傾向の作品に『北京海棠の街』がある。一方、早くから親子自然観察会や大井埋め立て地の野鳥生息地の保護運動に参加して『鳥よはばたけ』、『わが町東京・野鳥の公園奮闘記』などを著し、自然保護を訴える。日本野鳥の会役員も務める。近著は『自然連禱』（文芸春秋）。

かりましたが、その日、島につく直前に日没になり、水平線に太陽が沈んでいく光景が大変きれいでした。感激しながら上陸したら、島の人が「あなたは運がいい」と言うのです。「そうです。夕日が素晴らしかった」と言ったら、「イヤイヤ、冬は海が荒れて、夕日を見るどころか、お客さんは船酔いでみな倒れてしまう」と言うのですね。海が荒れなくて運がいいと言うのです。

三善　屋久島は杉で有名ですが、この頃は木を切らないでレントゲンか何か科学的な試験で、年輪を調べることができるようになっています。そこで、樹齢何千年という杉の年輪からいろいろなことが分かるようになりました。

たとえば、西暦千何年には、お天気が続いて雨が降らなかったから、年輪が大きくなっていないとか。

また、源平壇ノ浦の戦いの年は、西日本の旱魃がひどかった。平家は九州ゆかりの人を集めて再び源氏と戦おうと思って壇ノ浦まで行ったが、もう二年ぐらい飢饉が続いていて九州には平家を応援する余力がないので、平家は壇ノ浦で敗れてしまったとか、年輪によって推論できるそうです。

反対に、頼朝が挙兵した年は、非常に豊作で農民が挙って挙兵に参加したので、頼朝の勢いが非常に強くなった、とか。

ですから、屋久島の杉は日本の歴史研究に大きく役立っています。お役に立っているから「屋久(やく)(役)杉」というのかも知れません(笑)。

東京再発見　身近な旅

三善　加藤さんには『わが町東京・野鳥の公園奮闘記』という著書がおありですね。東京の町をいろいろ歩かれて、印象に残った所はどんな場所でしょうか。

加藤　新宿の高層ビル街のような新しいものと、いかにも江戸の昔からといった場所とが、わりと調和して、ちゃんと残っていて、東京は好きな町です。西新宿の高層ビルの夕焼けも素晴らしいし、昔の町並みも情緒があります。

ただ、これからどうなるかが心配です。建物も古くなり、ビルがどんどん増加し、また別の東京になってしまう可能性があります。できれば、その新しいものも、古いものも共存できる町であって欲しいと思っています。そして、人間だけでなく、人間以外の動物とか、植物もずっとそこに住んでいられる所であって欲しいのです。

大田区大森の先に、大井埋め立て地があります。そこに、私たち野鳥のグループが働き

かけて、東京都が野鳥のための公園を作り、今年の秋にオープンします。

自然を復元し、二十七ヘクタール近くの地域に、野鳥がより安全により多く住めるようにして、自由に観察に行ったり、散歩ができるようにしました。

昭和三十年代までは、東京湾は葦原があり、堀割を海苔採りのべか船が通っていたそうです。鳥もいましたし、キツネやタヌキまでいたそうです。一部だけですが、その時代の雰囲気を復元したわけです。さまざまのものがあることが、東京の面白さではないでしょうか。

三善　旅というのは、何キロ以上歩くとか、乗り物を利用しなくては旅といわないという規則はありません。今朝、テレビを見ていたら、下町の深川に芭蕉の旧跡があるそうです。そこから、芭蕉は奥の細道の旅に出発したと言っていました。私も今度、はとバスにでも乗って、その深川芭蕉庵の跡に行ってみようかなと思っています。

東京に来て六十年になりますが、まだ東京で知らない所はいっぱいあります。また東京の人自体、案外いろいろ知らないようです。東京タワーに登ったこともないし、パンダを見たこともないという人が多いですね。

加藤　意識してみていますと、都内にも面白い所がたくさんあります。大井の埋め立て地もそうですが、東京湾にはお台場公園もあります。その先のまだ公園になっていない台場に船に乗っていったことがありますが、ジャングルのようになっていて、とても面白かった。

三善　私も行きましたが、江戸時代によくあれだけのものを作ったと感心しました。先日、私は、皇宮警察本部長の案内で、皇居へ行ってきました。道灌堀という太田道灌の作った堀や野良猫がたくさんいた所とか、昔ゴルフ場があった場所とかを見ました。いつでも行けるところではありませんけど、身近にも、まだまだ見逃している場所があるはずです。

旅にはこれが「旅」、これは「旅」ではない、といったものはありません。一人で行っても旅でしょうし、大勢で行っても旅です。

芭蕉の旧跡に行けば、奥の細道の旅をしなくても、芭蕉がどんな暮らしをしていたかを知る手掛かりになると思います。そうすれば、空間的な旅だけでなく、時代を超える旅ができるのではないでしょうか。

加藤　東京に住んでいたら、まず身近な芭蕉の旧跡に行って、それから奥の細道のどこかに行けば、また一層感慨が深まると思います。そういうことなんですね、旅の良さは。

三善　身近な所でも、小さな旅が楽しめて、心をひろげることができるわけですね。